



Title	一九世紀日本における〈歴史〉の発見：屋代弘賢と 〈考証家〉たち
Author(s)	表, 智之
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1997, 31, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/56570">https://hdl.handle.net/11094/56570</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 一九世紀日本における〈歴史〉の発見

—屋代弘賢と〈考証家〉たち—

## 表 智之

### はじめに

日本の一八世紀末は、近代的な諸学問の草創期として、これまでにも注目を浴びてきた。地理学・考古学・民俗学・書誌学：様々な学問の研究史記述はこの時期を、近代的学問成立の前駆的段階として位置づけている。一九世紀に入り、いわゆる近代化の時代を迎へ、欧米からそれら諸学問の方法を吸収する直前の、いわば下地が成立した段階、というわけである。そこに日本の近代化と帝国の建設がいち早く成功した前提条件を見出す者もいれば、むしろ欧米的近代化に対するオルタナティヴとしての内発的近代を見出す者もいる。この論考は、一八世紀末～一九世紀初頭の日本に〈歴史〉の一―学問としての歴史学でなく、歴史的な思惟そのものの一―成立を見ようとするものであるが、右のどちらの立場にも与するものではない。

筆者は「近代」というものを、いまここにおける自分自身の生を捉え直すために、常に批判的に問い合わせねばな

らぬものと捉えている。いわば、自分自身の拠つて立つ基盤自体の相対化であり解体である。筆者が問い合わせる「近代」とは、直接的には、いわゆる近代アカデミズムを指している。筆者の視点からは、日本の近代アカデミズムの成立は、それが制度的裏付けを伴つて構築される一九世紀末～二〇世紀初頭に求められる。本稿は、近代アカデミズムの成立によって一度解体され再編成されていく一八世紀末～一九世紀後半の知の体系に関する記述である。そのような知の体系は、欧米的近代の受け入れ素地でもオルタナティヴでもないと筆者は考える。近代アカデミズムの成立を含めた近代というモメントは、常に世界規模での相互関係の中で進行する世界的事件であるが故に、欧米の近代と日本の近代などというカテゴリーは全く意味をなさない。あり得べきは、近代という世界的事件が欧米では如何に経験されたのか、対して日本では如何に経験されたのかという、近代という経験の地域的偏差でしかない。本稿が記述しようとする、日本の一八世紀末～一九世紀初頭における新たな知の成立が、日本における近代の経験のありようを強く規定しているのは言うまでもない。だが、その新たな知が如何に成立したかという問題にせよ、その知が近代の経験の中で如何に解体・再編されたかという問題にせよ、その知が準近代的であるのか反近代的であるのかという二項対立的な問いとは無縁のものである。本稿を含めた筆者の歴史学的実践は、むしろそういう二項対立的な問題構成自体の解体をこそ企図している。

## (二) 「歴史」というペースペクティヴ

筆者がここで言う「歴史」の発見とは、第一には起源の発見であり、第二には来歴の発見である。前者は、対象のいまここにある姿の彼方に、或る本来の姿を見出すことで、対象を歴史化すること。後者は、対象のいまここに

ある姿と、彼方に見出された起源との間を架橋する、対象の内側に秘められた歴史を読みとり開示することである。ここではまず、儒学の領域における同様の視点の転換を例としながら説明しよう。

第一の起源の発見とは、儒学の領域においては、「古学派」の登場による経書の歴史化にほかならない。古学派の登場以前においては、経書は、清朝中国においてテキスト化され、江戸の世の日本において出版された、その意味で、あくまで現在的な書物であった。また内容に即して言えば、世界の根源的な理がそこには具現化されているとされ、その意味で、時空間を超えて読者に教えを授ける聖典にほかならなかつた。ところが古学派にとっては、経書は、はるか古代中国における発話の痕跡にほかならない。それは時空を越えて読者に教えを授けるのではない。中国歴代の王朝を経て、多くの校訂者、多くの注釈者の手を経て、言語を異にするこの日本へと渡来し、漢文訓読という翻訳装置によって処理されて、ようやく読者のもとに届いた、古代中国の発話のかすかな痕跡なのである。

古学派成立期——すなわち、伊藤仁斎や荻生徂徠が登場してきた段階では、経書を古代中国の発話の痕跡と捉え、孔子の、或いは古代聖王の発話の本来の意味を回復せしめんとすることは、宋代の校訂・注釈に依拠する朱子学派に対する解釈上の闘争としての意義を強く持つていた。それ故に彼らは、既成の経書解釈を解体するために、古代中国の原発話と、そのかすかな痕跡としての経書との越えがたい懸隔を強調する傾向が強い。古代の発話と現在の経書との間を記述によって充填する作業は、仁斎の後継者、伊藤東涯の登場を待たねばならなかつた。<sup>(1)</sup> 東涯は『古今学変』（享保七年＝一七二二成稿。寛延三年＝一七五〇刊行）を著し、唐虞三代から宋代明代に至るまでの儒学説の沿革を記述したのである。

儒学の領域における、こういった起源の発見——経書の歴史化——およびそれに続く來歴の発見——儒学説の沿

革の記述——と相關的に、時期的には若干遅れる形で、より広範な学問領域における「歴史」の発見が行われることになる。時に一八世紀末、儒仏神や国学などの学問領域の枠を越え、また細かな学派の枠も越え、結社的な閉じた空間でなく、むしろサロン的な空間で様々な考証作業を行う人々が急速に増えていた。一定の流動性を持つたサークルを形成し、定期的に会合を持ち、同人の持ち寄った様々な事物について共同で考証を行う彼らのことを、筆者は、その超領域性に鑑みて敢えて漠然と「考証家」と呼んでいる。<sup>(2)</sup> それら「考証家」の活動において起こつた「歴史」の発見を跡づけることが、本稿の主題である。

## (二) 寛政四年畿内寺社宝物調査

「考証家」たちによる「歴史」の発見は、三段階の契機を経て進行する。第一に、寛政の内裏造営と寛政四年畿内寺社宝物調査による、古文物——特に書画への関心の興隆。第二に、模本図録刊行の隆盛による「一次資料」の成立と普及。第三に、考証の成果の百科全書による体系化と、それに伴うパースペクティヴとしての「沿革」の成立。そして、この三つの契機をたどることによつて浮かび上がる、事態の中枢を担う一人の人物がいる。屋代弘賢(一七五八—一八四一)<sup>(3)</sup>である。

屋代弘賢は、持明院流の書家である。寛政二年(一七九〇)より柴野栗山のもとで『国鑑』編纂に参加。寛政四年には、のちに述べる畿内寺社宝物調査に参加。翌五年より奥右筆所詰に昇格し、また和学講談所会頭にも就任した。同時代の「考証家」を代表する人物の一人であり、和学講談所のみならず、耽奇会や兎園会など「考証家」の活動を特徴付けるサークルや事業にはことごとく同人として名を連ねている。参考までに、弘賢に関する世評を、

小説家主人による戯作『皇朝學者妙々奇談 しりうごと』(天保二年＝一八三一年序)から引いてみよう。乞食僧に化けて現れた空海が、弘賢を詰る場面である。

足下古跡に似するを巧とせざる見識をば用ひず、やゝもすれば、わが古跡を襲ひてよしとせらる<sup>(4)</sup>…。

足下すこぶる藏書家の聞えありて、不忍文庫の名を知らぬものもなけれども、好事癖はやめられよ<sup>(5)</sup>。

道語にも無名の名は我を養ふの宅、無貨の貨は我を養ふの福といへば、無用の年玉くばりや、黄金をむさぼる事などは、心をつけてあらためらるべし。<sup>(6)</sup>

書家としての弘賢の名声は、主に空海の筆跡の分析とその再現——いわゆる「臨書」——に負うところが大きかつたようだ。さらに蔵書家としても、私文庫「不忍文庫」の名とともに著名であった。また、そのお大恩ぶりが揶揄されるようないつぱしの富豪でもあつたらしい。全体としては、好事家という評価がもつともしつくりしていると言えるだろう。この弘賢が、豊かな経済力と膨大な蔵書、幕吏としての権限や、何よりもその幅広い人脈を駆使して参画した様々な事業が、〈考証家〉による〈歴史〉の発見を主導していくことになるのである。

第一に挙げておくべき重要な契機は、寛政四年（一七九二）に行われた、京・大和地方の寺社に収蔵された宝物類の幕府公式調査である。期間は同年一〇月から一二月。一〇月九日に江戸を立ち、二二日に京へ到着。そのまま一月一六日まで京で調査を行い、一七〇一九日は宇治にて調査。一九日から一二月八日までは奈良地域での調査を行っている。調査責任者は、公儀寄合儒者柴野栗山。部下として、公儀本丸付書役（当時）屋代弘賢と、公儀具足御用春田永年が随行している。九月末に先行出立していた土佐派の画家・住吉広行とは、京で合流した。また、

藤貞幹が京で合流し、奈良地域の調査に参加している。その目的についてであるが、弘賢の調査紀行『道の幸』（寛政六年序）は次のように伝えている。<sup>(7)</sup>

遊たかなる政四とせ神な月の比、柴野彦輔ぬし、賢聖障子ものせられしことによりて上京有へき由聞ゆ。住吉広行は長月末つかたとくたちぬとか。三日の夜、やつかれにもまかるへきよし、内ゝの御さたあり。（中略）さるにても、何の道にかくは物せらるゝにやと彦輔ぬしにとひたれば、そのことにて侍り、此たひかゝるついて、都近きあたりにありとある古き筆のあともうつして奉れとの事也。されば絵は広行に、手はそこにと思ひかまへたるなりと聞ゆ。筆の道は年月このむかたのことなれば、いと／＼嬉しさたと、へんかたなく、かつは心のあはたゝしさ、いふはかりなし。<sup>(8)</sup>

「賢聖障子」とは、内裏の中央に位置し、主な宮中儀礼の場となる紫宸殿に設置される儀式用の障子で、唐代以前の賢臣や文人計三二人の像が描かれている。平安内裏は天明八年（一七八八）に焼失し、翌寛政元年より再建工事が開始されていた。栗山の寛政四年の上京の主目的は、この紫宸殿賢聖障子の復元作業の監修である。この機会を利用して、京・大和各地の寺社を訪れ、宝物として所蔵されている書画を閲覧し、模写しようと言うのだ。絵画の模写はむろん、賢聖障子復元の繪筆を執る住吉広行の役割。筆跡の模写は、臨書に長けた弘賢の役割である。

寺社の宝物には、空海や橘逸勢などの著名な能書家の真筆と伝えられる——現在では「伝某々筆」と称されるような——筆跡が数多くある。もちろんそれらは、所蔵先や装幀などの特徴についてはすでに文献で紹介されており、弘賢もすでに知っているものばかりであつたろう。だが、文献で間接的に得られたデータと、現物を直に検分した

場合にしか得られないデータとが齟齬することも当然ある。弘賢の調査の場合、甚だしくは真筆の筈がまつたくの贋作であることが明らかになることもあつた。そのため弘賢は、自分の鑑定結果が宝物の価値をおとしめて所蔵者の怨みを買うことを怖れ、『道の幸』の公開をすいぶんしぶつていたという。すなわち小野茂語の序文に曰く。

何の寺くれの社に伝へつゝ、宝としてあかまへをける文書を初め、もうくの調度までうちみるにしたかひ、浪速のよしあしを心にまかせて記しつれは、後に聞伝ん法師みこのうらみをも、はゝかりのせきとゝむへく思ふときこへられぬるを、いて其人を欺く伝へこそうたて思ふ給へらるれ。<sup>(9)</sup>

『道の幸』により伝えられた弘賢の調査の模様は、文献を介した二次的なデータでなく現物を直に検分することの持つ大きな意義を、江戸の「考証家」たちに知らしめたことであろう。「考証家」サークルの会合に、典籍にせよ文書にせよ美術工芸品にせよ、あたう限りオリジナルに近い物——近代の語彙にいう「一次資料」——を持ち寄り、その精密な模写を行うことを目的とするケースが目立つようになる時期が、このしばらく後に訪れるのである。またその一方では、金属器や石造物の銘文——いわゆる「金石文」——の拓本を中心に、一次資料の模本図録集の編纂・刊行事業が隆盛を迎えるのも、ちょうどこのすぐ後になる。

### (三) 「金石文」模本図録の編纂と刊行

まずは、模本図録集の主な例を年代順に挙げておこう。<sup>(10)</sup>

○屋代弘賢編『金石記』／寛政五年（一七九三）刊行

寛政四年畿内寺社宝物調査に随行した際に採集した拓本を、公儀へ提出した物の写し。  
仏像・鐘・建造物などの銘文を一件収録。配列基準なし。

○藤貞幹編『好古小録』／寛政七年（一七九五）刊行

金石・書画・雑考の三項目を立て、巻末に付録として模写図を収録。

金石資料二二件はおおむね年代順に配列されている。

○同編『好古日録』／寛政八年（一七九六）刊行

特に項目を立てずに、金石文を含む古物古文書を一一九件収録。

模写図は本文扱いで、分類配列の秩序は特にない。

○松平定信編『集古十種』／寛政一二年（一八〇〇）成稿

肖像・扁額・文房・書画・碑銘・鐘銘・銅器・兵器・楽器・印章の一〇分類。

全八五巻・収録件数二一〇〇点余、細かな考証よりも資料収録の網羅性に秀である。

各項目内部での資料の配列には特に秩序はない。

○狩谷板齋編『古京遺文』／文政元年（一八一八）成稿

金石文資料のみを集め、主資料二七件と付録三件の計三〇件収録。

資料を綿密に年代順に配列し、これまでで最も詳細な考証が付されている。

○西田直養編『金石年表』／天保九年（一八三八）刊行

金石文の資料名のみを年表形式で五一〇件余収録している。

直養は本格的な金石文研究書『金石志』を構想しており、元々はその付録便覧として作成された。

それぞれの特徴については、横に注記した通りである。全体を通して見ると、年代が下るにつれ、収録資料が増える傾向にあるばかりでなく、確たる方針をもつた資料の分類・配列が試みられるようになっていることがわかる。特に、金石文を年代順に配列しようという発想の成立は、注目に値する。その背景には、多くは成立年次が明記され、しかも文書などと違つてコピーミスや改竄の入る余地のない金石文の特質に対する人々の関心がにわかに高まつていたことが読み取れよう。すなわち、金石文の歴史資料化である。

例えば、薬師寺東塔第六層屋上の露盤——心柱の土台——にあると伝えられていた創建当時の銘文の場合、場所が場所だけに実見した者は皆無であった。が、弘賢は、調査責任者栗山の強い制止を振り切つて塔の最上層まで登り、その銘文がたしかに存在することを確かめ、同時にその正確な内容を伝えた。すなわち、弘賢『金石記』「薬師寺塔銅櫓」に曰く。  
(11)

此の銘は、寺伝に云はく、舍人親王の書なり、と。世遍くこれを識れども、六層浮屠上の空輪心柱に刻まれ、最も得難し。弘賢希有にもこれを獲て、抃躍に堪へず。以て此に粘り、嘗ろみに曰はば、天武天皇九年庚辰を以て即位八年とす。其の舍人親王の書なりとせば、則ち何ぞ紀を合せざらんや、と。或る人曰く、否なり。此はこれ、當時実を以て書するのみ。蓋し撰史に筆を曲げること、亦た已むを得ざるなり、と。以て日本史正論に徵すべし。  
(12)

この銘文は、天武天皇即位八年を庚辰の年と伝えている。すると即位元年は癸酉の年ということになる。ところが、

『日本書紀』天武紀では、即位元年は壬申の年とされている。薬師寺側の伝承によれば、銘文の揮毫者はほかでもない『日本書紀』の撰者・舍人親王であるにも関わらず、である。弘賢とその助言者は、この齟齬を『日本書紀』記述の政治的な歪曲であると捉えている。すなわち、天武の即位が銘文通り癸酉の年であるとすれば、いわゆる壬申の乱に先だって大友皇子の即位があつた可能性が非常に濃くなる。一方、天武の即位を壬申の年とする『日本書紀』の記述は、大友の即位を完全に否定するものである。『日本書紀』がほかならぬ天武朝において編纂されたことなどから見て、天武朝の自己正統化のために『日本書紀』の記述は即位の年を詐称したのではないか、と推測したのである。<sup>(13)</sup> この推測は、寛政六年（一七九四）、和学講談所会頭日下部勝皋の『薬師寺櫻銘釈』においても主張されることとなる。勝皋は、『日本書紀』の撰定年次が櫻銘の製作年次よりさらに十数年後の後であることから、櫻銘の記述を真とし、『日本書紀』の記述を政治的な歪曲であるとしたのである。

この時期はちょうど、『日本書紀』を含めた諸典籍の異本の対照や原本の復元など、近代で言う書誌学的な作業が成立し始めた時期である。典籍の原資料を求めるそういう動きに呼応して金石文への関心がにわかに高まる状況の中で、弘賢の決死の資料実見と勝皋の『書紀』歪曲論が持つたであろう衝撃は、非常に大きかつたと考えられる。金石文の模本図録が盛んに刊行されるのは、文献による二次的データでなく原資料を直に検分することの重要さを弘賢が証明したことと呼応しているよう。また、それら図録で資料が年代順に配列されるようになつていくのは、典籍の記述の改竄や歪曲を糺す力が金石資料にあることを勝皋が証明したことと呼応していると考えられるのである。

#### (四) 『古今要覧』編纂事業

以上、幾分散漫ながらも、〈考証家〉の活動において「歴史」というパースペクティヴがどのように成立したかについて、二つの重要な契機に関わらせて述べてきた。最後に、〈考証家〉たちの該博な作業群の集成を目論む一大事業の登場について述べて、本稿のまとめとしたい。

文化七年（一八一〇）屋代弘賢は、公儀より『古今要覧』編纂を主管せよとの命を受けた。以後弘賢は、多数の〈考証家〉たちをとりまとめつゝ、一八分類八五項目にわたる壮大な構想のもとに百科全書『古今要覧』の編纂事業に没頭することになる。最初の成果が調進されるのが文政四年（一八二一）。その後も年一回ないし二回、順次成果が調進され、天保二年（一八四〇）弘賢が没して後も翌々年の天保二年（一八四二）年まで調進は続けられたが、残念ながらそこで編纂は中絶し、未完となつた。

事業としては公儀のものであるが、創案自体は弘賢がかなり以前より暖めていたものである。弘賢の手になる凡例（寛政一〇年＝一七九八付）により、その構想の一端に触れてみよう。

凡我邦の經濟、隋唐の制に本づかれしよりして今日の太平に至る。是古聖王の教旨にして、其うつし学ぶべきはこれを取うつし、学ぶべからざるは是を捨て、風土自然の然らしむる所によつて制を立て法を設らる。礼は人情に本づくといへば、こゝに異議なかるべし。…今此書のしるす所は我古聖王の教旨より出て西土の法によられし所、其証拠明確なるものはこと／＼これをのせ、すべての事物其起る所を初にし沿革を後にし、或は

名有て物亡び、或は物伝はりて名存せざる、諸家の考索を得て、其の所以を知者も亦皆是を識し、其考索を失し説をあやまるものも捨ずして其下に分注し、これが是非を弁じて童蒙の惑を解。<sup>(14)</sup>

言うまでもないが、弘賢の同時代にはすでに国学が成立し、一定の勢力を持っていたし、弘賢自身も平田篤胤などの国学者と親交を保っていた。国学の立場からすれば、隋や唐から輸入された制度は、日本古来の良俗を乱した当のものであり、古代と現代を隔てる忌まわしき夾雜物にほかならない。対して「考証家」の中には、度量衡などの輸入制度の変遷についての考証をよくしても、それ以前の生活風俗については無頓着なきらいがあつた。それに対し弘賢は、その両方——日本古来の事物も中国より輸入した事物も——とともに『古今要覽』に収録しようというのである。弘賢が同時代の諸学問諸考証の集大成を企図していたことは明白である。

ではいつたい弘賢は、どういった体系のもとにそれらを集大成しようというのか。第一に「其起る所」すなわち起源と、「沿革」すなわち事物がその様態をどう変遷させていったかの来歴とをともに明らかにすること。第二に、「名有て物亡び」た事物や逆に「物伝はりて名存せざる」事物の名と物の関係を復元すること。第三に「諸家の考索」を積極的に吸収し、「其の所以を知者」つまり當を得てている説はもちろんのこと、「其考索を失し説をあやまるもの」をも併記し、その事物にまつわる考証の来歴をも記録すること。すなわち、事物それ自体・その呼称・事物に対する考証——その三つのレベルにおける起源と来歴をすべて明瞭にしようというのである。言うなればこれは、知の体系そのものの起源と来歴を記そうとしたものにほかならない。

本稿の課題と関わって注目されるべき点は、「沿革」すなわち来歴を編纂体系の軸としている点である。これ以前

の百科全書——厳密には、前・百科全書的な「類書」——には、こういつた軸が決定的に欠けていた。例えば、いわゆる「有職故実」学を体系化した伊勢貞丈の『貞丈雜記』(宝暦一三年～天明四年頃成稿)の奥書には、次のようにある。

この雜記は、我が子孫家伝の古書を見る便にもなれかし、又人に故実問われたん時に返答のたすけにもなれかしと、書きあつめ置くなり。<sup>(16)</sup>

「故実」は本来、古い儀式秩序の知識を保存するための學問であり、そこで問われているのはあくまで起源である。したがつて弘賢のように、起源ばかりでなく來歴——いわば、事物の純粹な形が崩れてしまつてからの事物のありよう——にも等しく記述する価値を認めることはあり得なかつたのである。

いま眼前にある二次的な事物でなく、オリジナルに近い一次資料を求める趨勢は、この『古今要覽』が構想されるような段階に至つて、オリジナルから現在に至るまでの來歴をも記述の対象とした。それは起源の発見によつて一度切断された古へと今とを、再び記述によつて充填する作業であり、〈歴史〉という通時的なパースペクティヴの中に事物を位置づけ、その意味を捉え返そうとする嘗みにほかならない。そのような作業の登場としての〈歴史〉の発見と、そこで成立した新たな知は、知の体系自体の來歴を記述する百科全書という技法とともに明治維新後に引き継がれていく。やがてそれは、歴史学——就中「国史学」——の成立とともに解体され、再編成されることとなるのである。

## 注

- (1) 東涯の登場と儒学史記述の成立については、宇野田尚哉「命題」から『発話』へ——一八世紀日本における《儒学史》の成立と儒家的知の変容——」（『懐徳』第六四号。懐徳堂記念会、一九九六）に詳しい。
- (2) 「考証家」的知の成立とその展開については、拙稿「〈歴史〉の読み出し／〈歴史〉の受肉化——〈考証家〉の一九世紀——」（『江戸の思想』第七号「思想史の一九世紀」。ペリカン社、一九九七）を参照のこと。
- (3) 屋代弘賢の伝記的事項に関しては、小杉櫻邨「源弘賢翁の略伝」（『古今要覽稿』第六卷。国書刊行会、一九〇五。原書房復刻版、一九七一）および森銑三「屋代弘賢」（『森銑三著作集』第七卷。中央公論社、一九七一）に詳しい。
- (4) 『百家説林』（吉川弘文館、一八九二）正編下一二五四頁。
- (5) 同右、一二五五頁。
- (6) 同右、一二五六頁。
- (7) 藤貞幹の参加を裏付ける資料としては、「寛政四年一一月一八日付立原甚五郎宛藤貞幹書簡」に次のようにある。「一先月廿二日、御用ニ付、栗山子並屋代氏上京。四年前承訣之意ニ而し分袂候処、不存寄緩々面会仕候。毎々御尊なと申出申候。昨日より宇治へ発向、明日は南都へ参り被申候趣ニ御座候」（『無仏齋手稿』より。『日本芸林叢書』（鳳出版、一九七二）第九卷五五頁。また弘賢『金石記』と貞幹『好古小錄』には、「興福寺南円堂前銅灯台」など、収録資料およびその考証に関して数点にわたる一致が見られる。
- (8) 国会図書館所蔵『鶯宿雜記』第八七巻収録『道の幸』三丁オモテ。
- (9) 同右二丁オモテ。
- (10) 金石文の図録に関する以下の記述に際しては、次の論文を参照した。鈴木晴彦「日本金石学」草創期——江戸期の金石研究概観——」（『書道研究』第一巻第六号。美術新聞社、一九八七）。同「日本金石学」草創期・補遺——『古京遺文』再検——」（『書道研究』第三巻第四号。同前、一九八九）。
- (11) 弘賢が実見した結果、銘文は露盤ではなく、心柱そのものの根元（すなわち「櫟」）に刻まれていることがわかつ

た。

(12) 『芸苑叢書』第二期第六回『金石記』四頁。原漢文。

(13) 大友即位論・非即位論それぞれの成立と展開、ならびにそこでの金石資料の位置については、星野良作『研究史

壬申の乱（増補版）』（吉川弘文館、一九七八。原著一九七三）を参照した。

(14) (15) 『古今要覽稿』第一巻「凡例」二頁（国書刊行会、一九〇五。原書房復刻版、一九七一）。

（考証家）が共有する「モノへのこだわり」から生まれる、この国学との対立については、前掲拙稿「歴史の読み出し／歴史の受肉化」を参照されたい。また、国学の側からの（考証家）との差異化については、拙稿「知の伝播と衝撃——平田篤胤と『毀譽相半書』——」（『江戸の思想』第五号「読書の社会史」。ペリカン社、一九九六）を参照のこと。

(16) 東洋文庫『貞丈雑記』第一巻序四頁（平凡社、一九八五）。

（大学院後期課程学生）